

神門5号墳(市原市)

ごうど

後円部(右手)の隅に立つ神門5号墳の説明板と標柱

[video](#)



2012年にも訪れているが、今回(2024年)再訪すると新しい説明板になっていた！

県指定史跡

神門 5号墳

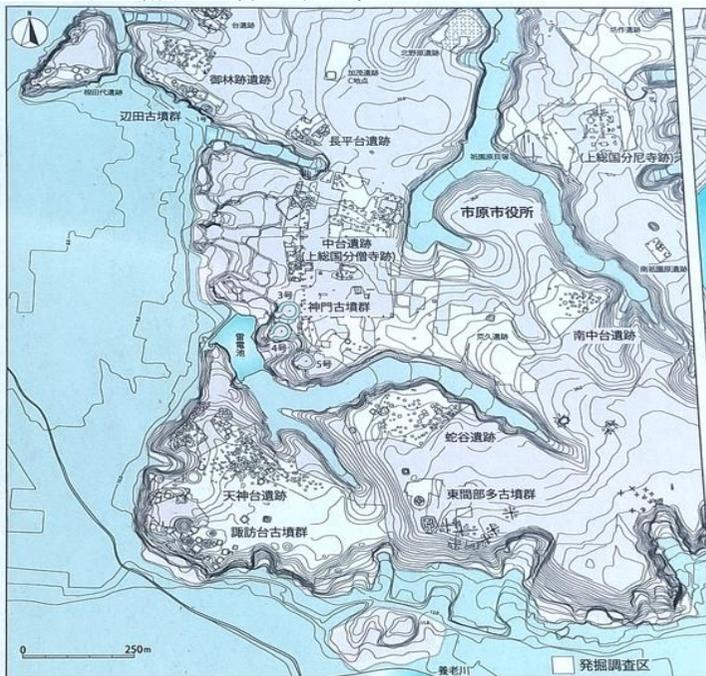
市原市惣社 5丁目 5-1

邪馬台国時代、西暦 3 世紀になると、汎列島規模で地域間の交流が活発になります。この時期、国分寺台地区の中台遺跡、南中台遺跡、長平台遺跡、天神台遺跡などでは、近畿地方（奈良県、滋賀県周辺）や北陸地方（福井県周辺）、東海地方（愛知県、静岡県周辺）、北関東地方（茨城県、栃木県周辺）などの特徴をもった土器が出土し、こうした地域からの移住や交流の地として、国分寺台地区は東日本でも拠点的な地域となりました。そして、これら遺跡群を中核とした地域統合の象徴として神門古墳群（3・4・5号墳）がつけられました。また、遺跡群の中心となる中台遺跡（上総国分僧寺跡下層）では、政祭の場と推定されている神殿風の掘立柱建物跡も発見されています。

現状、古墳群中最古の 5 号墳が、千葉県指定史跡として保存されています。5 号墳は、昭和 23 年に発掘調査が行われ、墳頂部直下から埋葬施設が確認され、鉄剣・鉄鏃・ガラス玉・土器等が出土しました。その後、昭和 58 年に国分寺台土地区画整理事業に伴って、改めて発掘調査が実施され、墳形などが明らかになりました。墳丘は、直径 30～32.5m、高さ 5m の円丘部（後円部）と、その西側の長さ 12m の突出部（前方部）からなる前方後円形であり、全長は 42.6m で周囲に幅約 6m の周溝をめぐらせています。前方部は短小であり、こうした墳形は、前方後円墳が定型化する以前の特征です。このような古墳は、奈良県桜井市纏向古墳群を中心とし、全国的にも数が限られており、5 号墳は、東日本においては最古の古墳です。西暦紀元後 3 世紀前半の造墓と推定されています。

神門 5 号墳は、市原における国づくりの過程を明らかにするだけでなく、古墳発生と前方後円墳の起源を考える上で極めて貴重な古墳です。

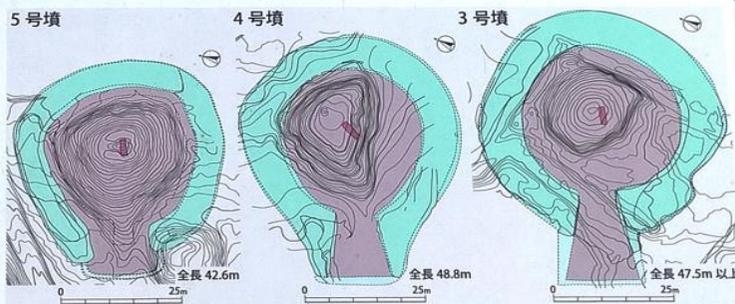
平成 26 年 3 月 市原市教育委員会



国分寺台地区の遺跡と神門古墳群（古墳時代早期）



神門古墳群（4号墳調査時）



発掘調査時の神門 5号墳

旧説明板では「いちじく形をした墳形」と記されていたが、新説明板では「纏向古墳群」の墳形と記されている/「纏向型前方後円墳」の一つということか…/
また、旧説明板では築造時期を「弥生時代終末期の弥生墓から古墳へ移り変わる時期」と記されていたが、新説明板では「3世紀前半」と記されている

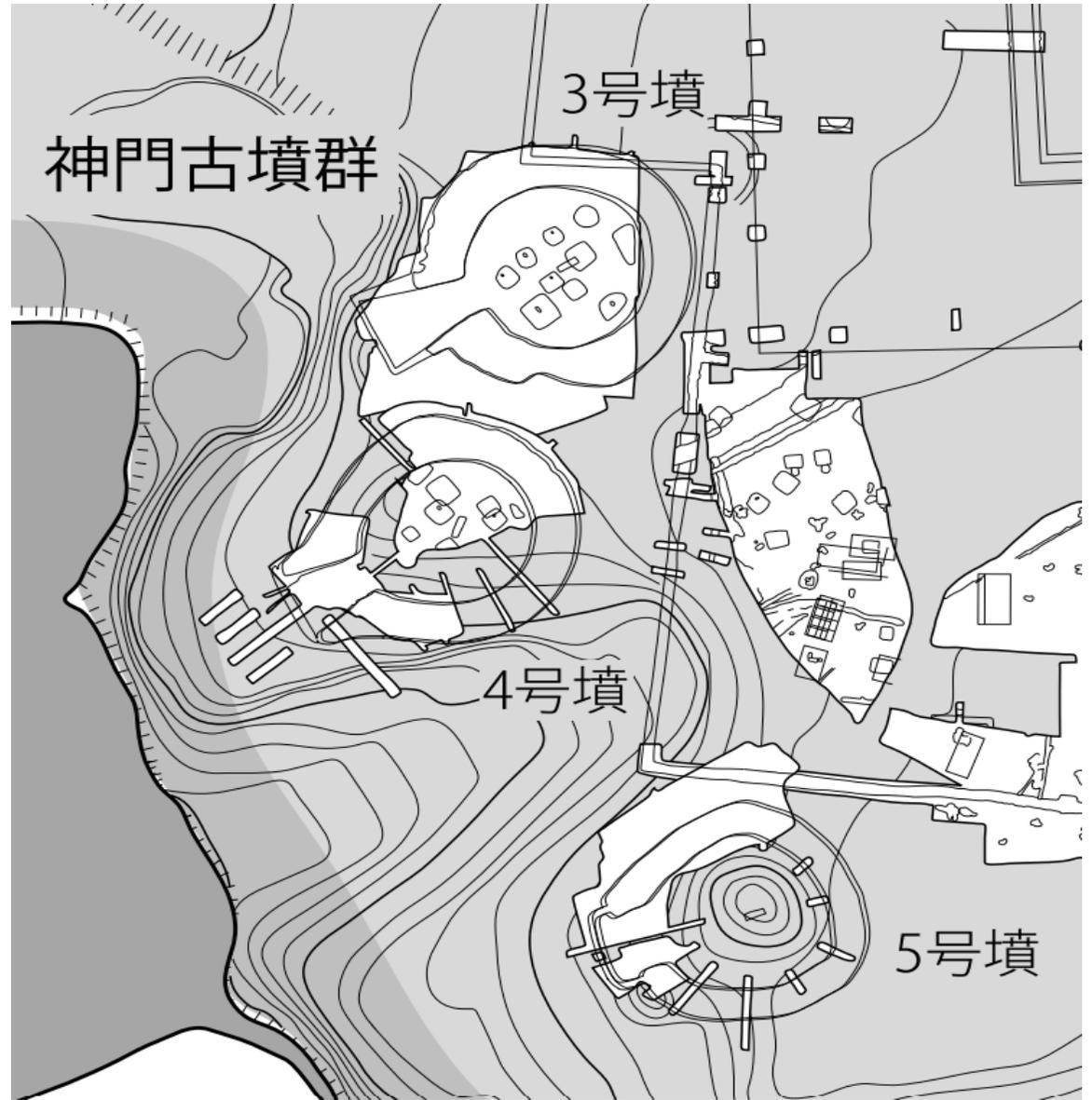
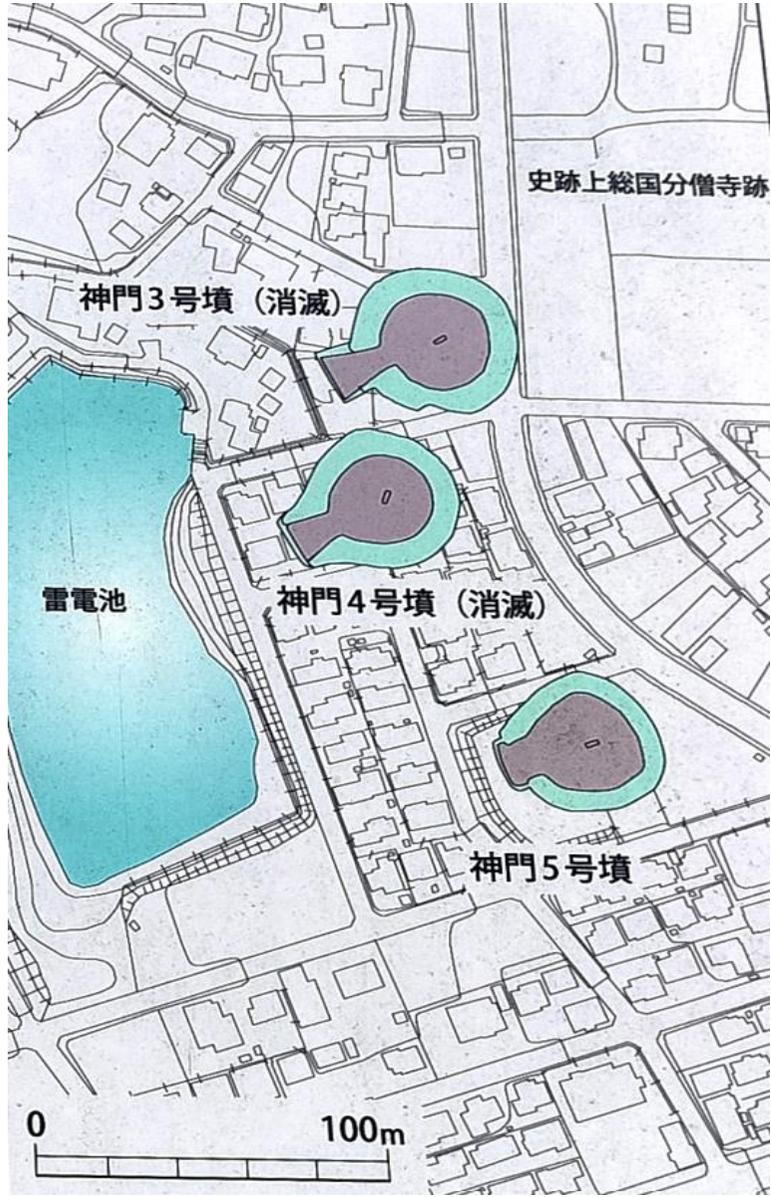
現状、古墳群中最古の5号墳が、千葉県指定史跡として保存されています。5号墳は、昭和23年に発掘調査が行われ、墳頂部直下から埋葬施設が確認され、鉄剣・鉄鏃・ガラス玉・土器等が出土しました。その後、昭和58年に国分寺台土地区画整理事業に伴って、改めて発掘調査が実施され、墳形などが明らかになりました。墳丘は、直径30～32.5m、高さ5mの円丘部（後円部）と、その西側の長さ12mの突出部（前方部）からなる前方後円形であり、全長は42.6mで周囲に幅約6mの周溝をめぐらせています。前方部は短小であり、こうした墳形は、前方後円墳が定型化する以前の特征です。このような古墳は、奈良県桜井市纏向古墳群を中心とし、全国的にも数が限られており、5号墳は、東日本においては最古の古墳です。西暦紀元後3世紀前半の造墓と推定されています。

神門5号墳は、市原における国づくりの過程を明らかにするだけでなく、古墳発生と前方後円墳の起源を考える上で極めて貴重な古墳です。

神門5号墳が築造されたとされる3世紀前半は「古墳時代早期」ということらしい

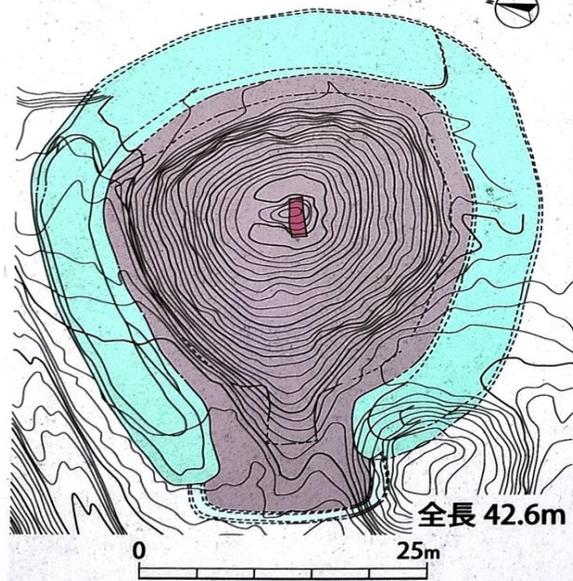


国分寺台地区の遺跡と神門古墳群（古墳時代早期）

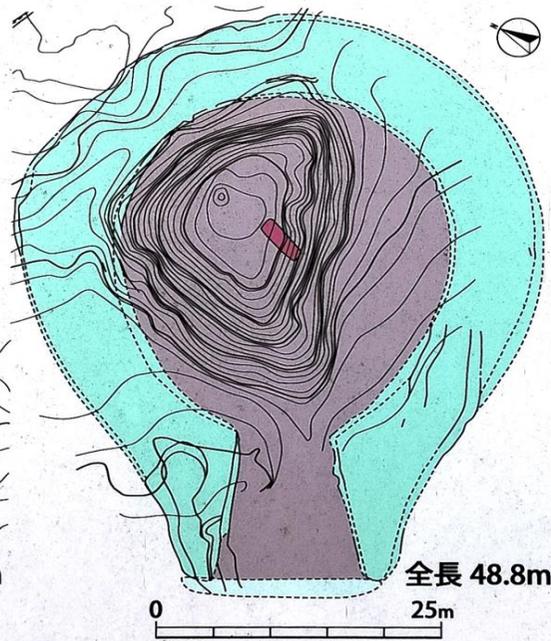


3世紀前半に5号墳→4号墳→3号墳という時系列で築造され、その墳形は突出部(前方部)が次第に長くなり、箸墓古墳に代表される、いわゆる定形型の前方後円墳に変化していく「定形化」のプロセスを示していると云う

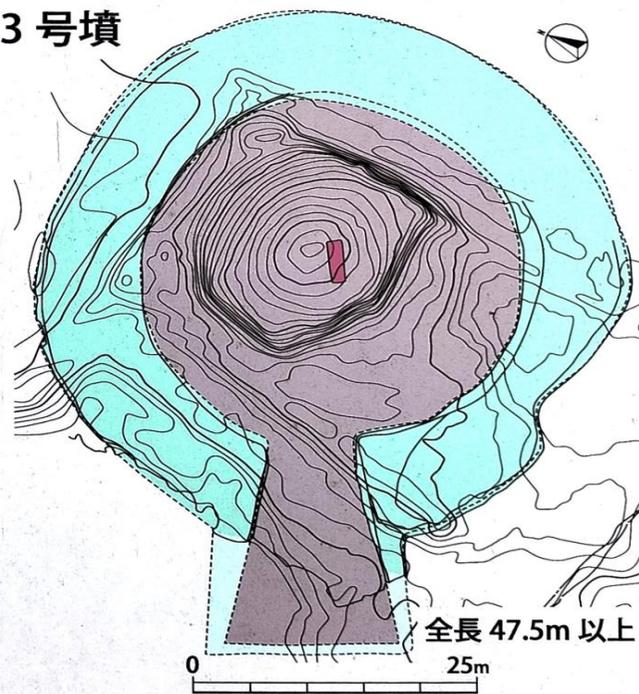
5号墳



4号墳



3号墳



正面は後円部で、右奥が前方部



左手が後円部、右手は前方部(非常に低くて短い)

 video



前方部から後円部方向を見たところ

 video



括れ部辺りで後円部を見たところ



振り返って前方部を見たところ

 video



後円部墳頂

 video



後円部の後方を見たところ



振り返って前方部方向を見たところ

 video



括れ部、前方部を見下ろしたところ

 video



後円部を後ろから見たところ

 video



後円部の裾を左手から右手に見たところ

 video

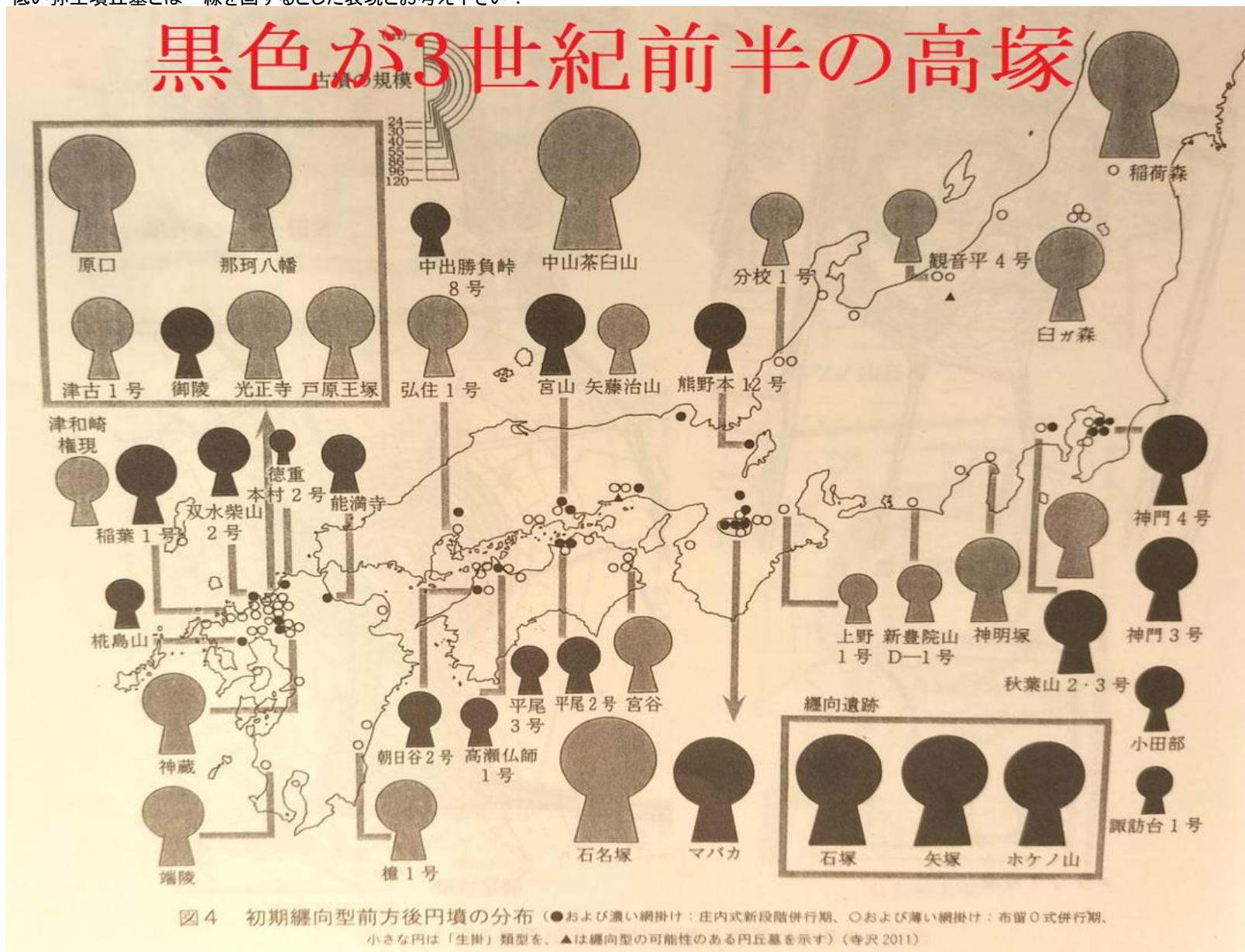


右手が後円部、左手は前方部

 video

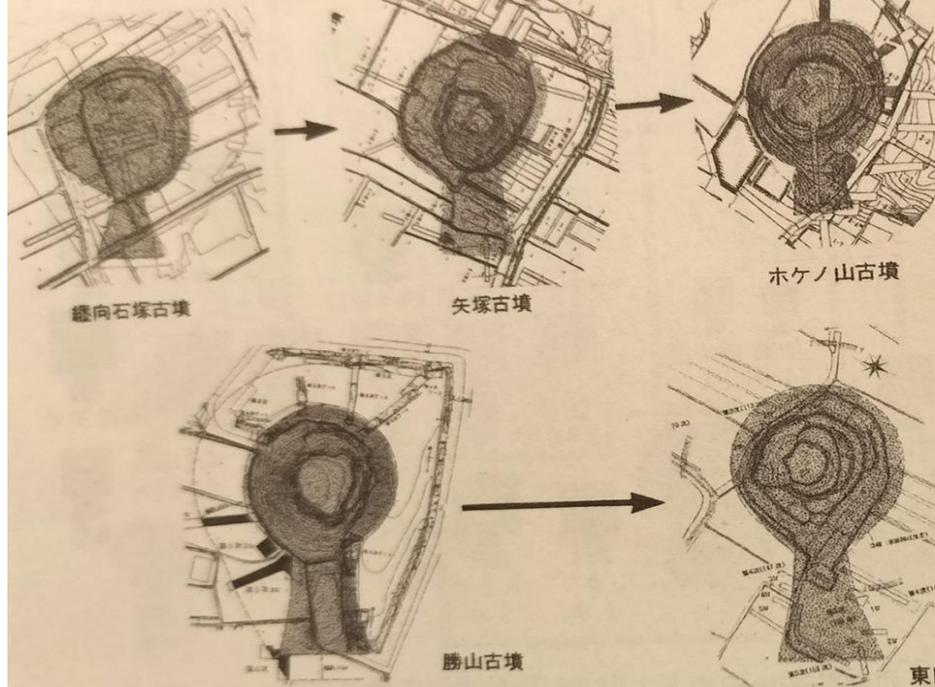


3世紀には纏向型前方後円墳が全国に波及しているようだ/神門古墳群もその一つらしい/「高塚」とは高い墳丘墓＝古墳のこととし、それまでの低い弥生墳丘墓とは一線を画するとした表現とお考え下さい！



畿内のいわゆる「纏向型前方後円墳」も3世紀前半に「纏向型」から「定形型」への「定形化」のプロセスが見られると云う/「纏向型前方後円墳」は後円部径と前方部の長さの比率がほぼ2:1とされていたが、最新の知見では「定形化」をしている古墳が認められるようだ

3世紀初め頃



3世紀半ば～後半



図10 纏向遺跡における「纏向型」と「定形化」、「定形型」

両資料共、2023年11月25日 東京フォーラム「前方後円墳創生」の配布資料に一部(赤字)加筆

※ 弥生時代中期以降に出現し、日本海沿岸に波及した「四隅突出型墳丘墓」も高塚であり、古墳と呼んで良いと思われるが、「纏向型前方後円墳」のように倭国全体に波及してはいないということから、その時点はまだ弥生時代という括りになろうかと思われる

纏向型前方後円墳とされる秋葉山3号墳(海老名市)

国指定史跡 秋葉山古墳群

平成17年7月14日 指定

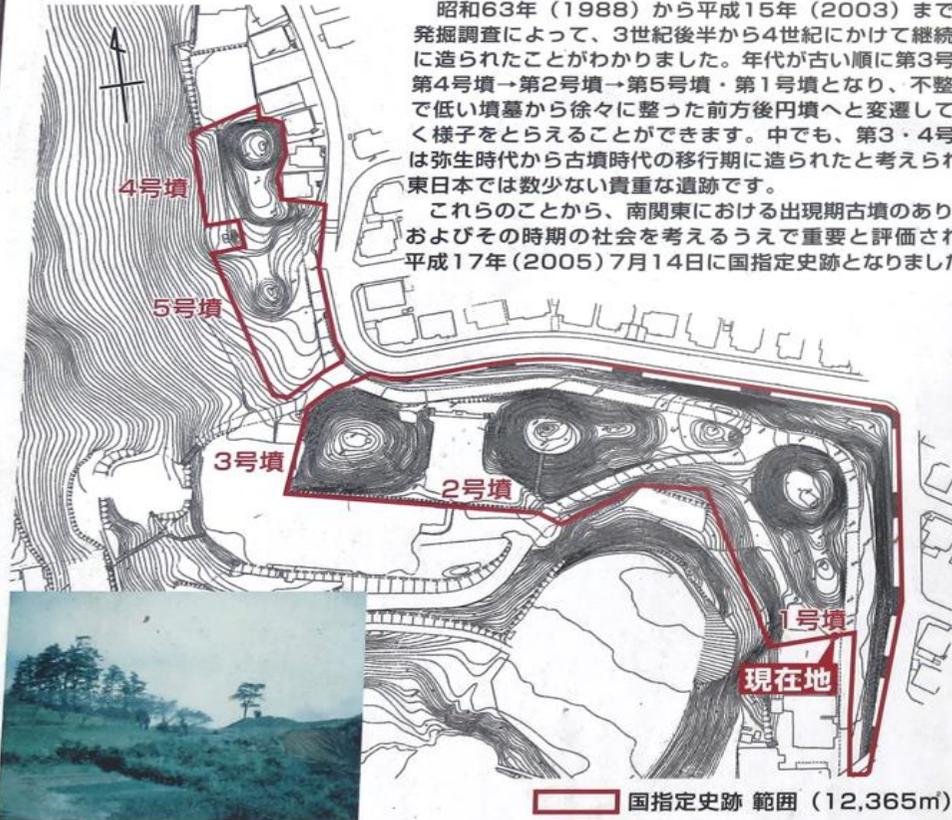
秋葉山古墳群は、座間丘陵の頂部に立地し、海老名市内で最も標高の高い場所（標高75～80m）にあります。北から第4号墳・第5号墳・第3号墳・第2号墳・第1号墳と5基の墳墓が地形に沿って連なっています。

古墳群から西を望むと、現在「海老名耕地」と呼ばれる水田と南北に流れる相模川が一望に見渡せます。また相模川の向こうには、丹沢山塊や大山を望むことができます。

このような景勝地であり、交通の要衝であったことから、この辺りを治めていた首長は、この地に歴代の墳墓を築いたと考えられます。

昭和63年（1988）から平成15年（2003）までの発掘調査によって、3世紀後半から4世紀にかけて継続的に造られたことがわかりました。年代が古い順に第3号墳第4号墳→第2号墳→第5号墳・第1号墳となり、不整形で低い墳墓から徐々に整った前方後円墳へと変遷していく様子をとらえることができます。中でも、第3・4号墳は弥生時代から古墳時代の移行期に造られたと考えられ、東日本では数少ない貴重な遺跡です。

これらのことから、南関東における出現期古墳のあり方およびその時期の社会を考えるうえで重要と評価され、平成17年（2005）7月14日に国指定史跡となりました。



第1・2号墳遠景（昭和32年撮影）
右：第1号墳、左：第2号墳

国指定史跡 範囲（12,365m²）

年代	各古墳概要		調査状況	出土遺物	
3世紀	3号墳	墳形	前方後円形（現状は円形）		
		墳長	大正時代の記録から推定51m 後円部（不整形円形）約38～40m		
		年代	3世紀後半		
		遺構	周溝、墓坑		
3世紀	4号墳	墳形	前方後方形		
		墳長	37.5m		
		年代	3世紀後半		
		遺構	周溝		
3世紀	2号墳(秋葉山)	墳形	前方後円形		
		墳長	50.5m（区画溝含まない） 後円部径33m（1号墳と同じ）		
		年代	3世紀末～4世紀初頭		
		遺構	区画溝、くびれ部墳裾溝、 くびれ部焚き火跡		
4世紀	5号墳	墳形	方形		
		墳長	一辺約20m（周溝含まない）		
		年代	4世紀前半		
		遺構	周溝		
4世紀	1号墳(山王)	墳形	前方後円形		
		墳長	59m（区画溝含まない） 後円部径33m（2号墳と同じ）		
		年代	4世紀前半～中頃		
		遺構	区画溝		

■ 墳丘
■ 溝（周溝・区画溝）

平成18年2月 海老名市教育委員会設置

前方は後円部、その手前に短い前方部があったようだが削平されてしまったらしい

[video](#)



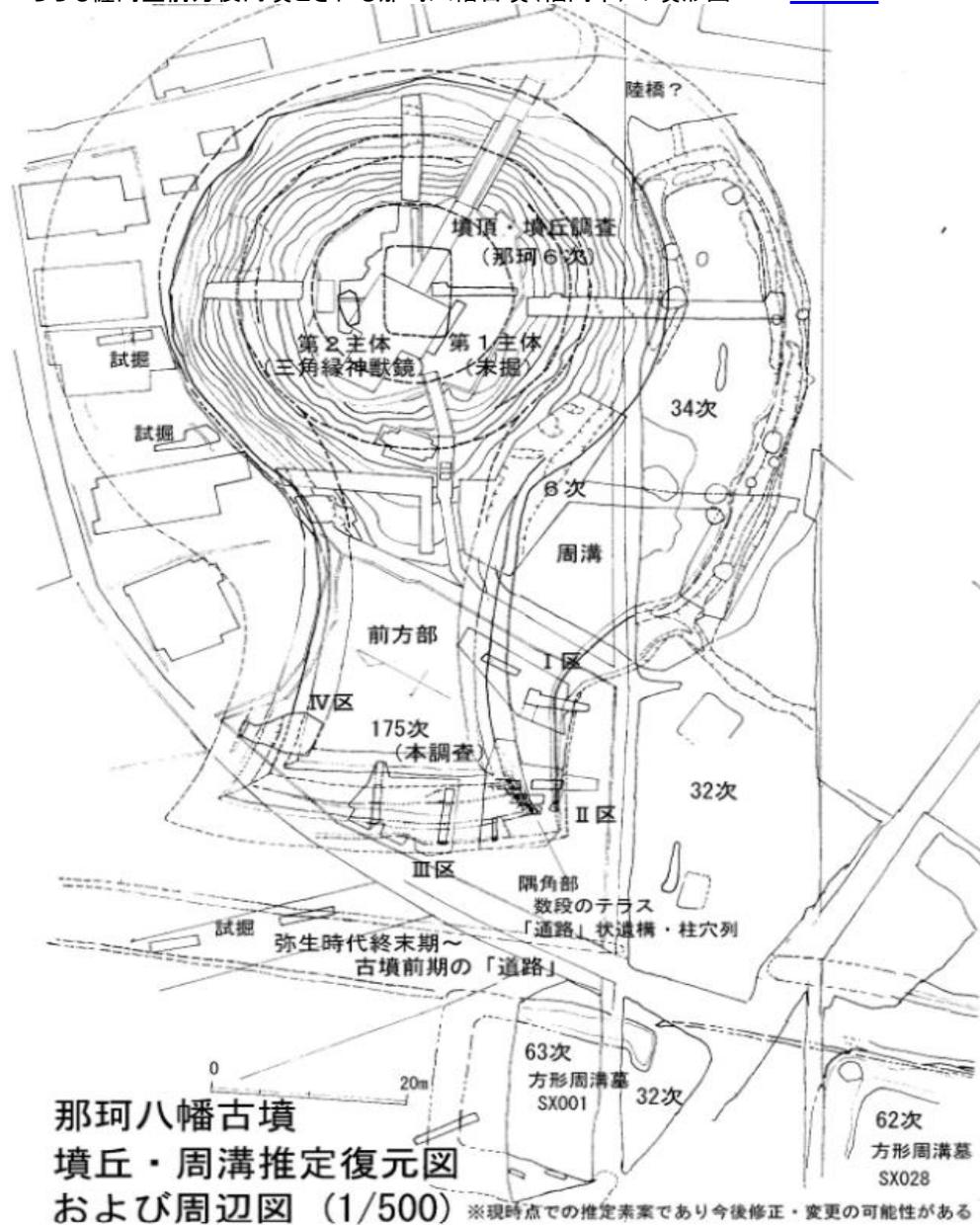
後円部の墳頂

[video](#)



こちらにも纏向型前方後円墳とされる那珂八幡古墳(福岡市)の墳形図

[video](#)



後円部墳頂に鎮座する那珂八幡神社

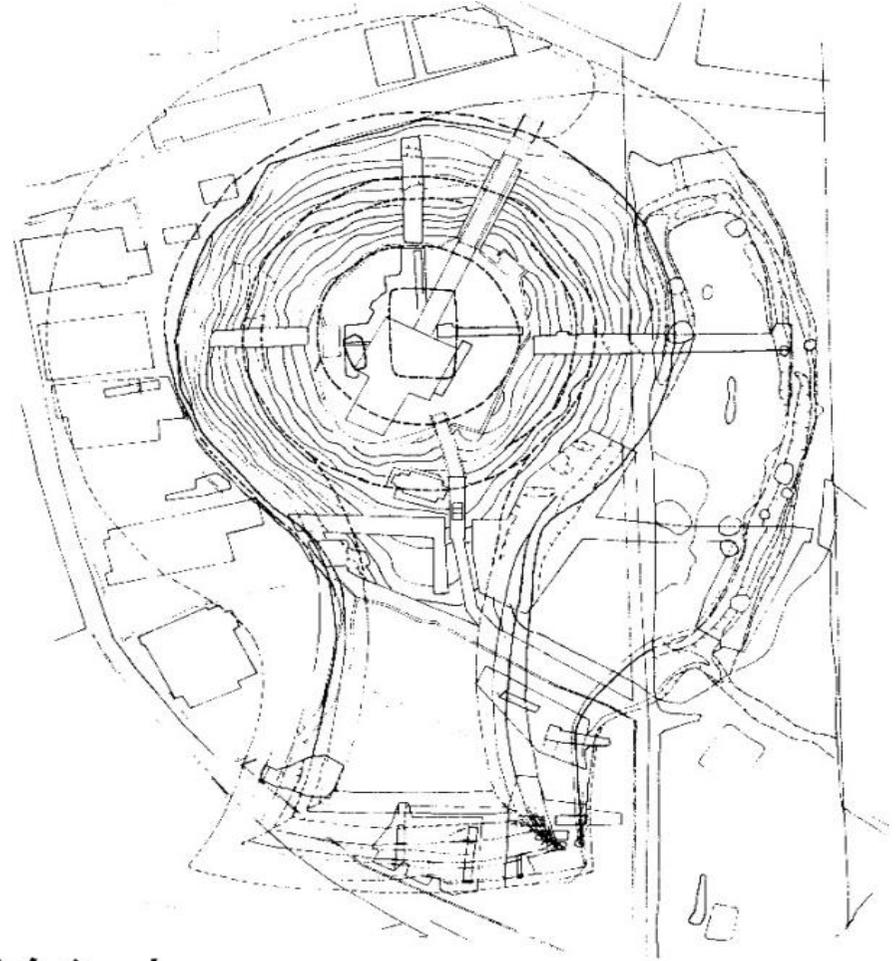
[video](#)



現地説明会資料/新たな発掘調査によると、後円部径と前方部の長さの比率がほぼ2:1とされる纏向型前方後円墳よりも前方部が少し長い(8:5)ということらしい



(「纏向型」をモデルとする案：概報段階・文献①に加筆)



那珂八幡古墳の従来の復元案（左）と、
今回の調査に基づく復元案（右）



那珂八幡古墳確認調査（那珂遺跡群第 175 次調査）現地説明会資料

平成 31 年 2 月 16 日（土）

福岡市経済観光文化局埋蔵文化財課

1. 調査の成果

- ①以前の発掘調査や試掘調査では不明確だった前方部周溝の形状や規模がより明確になり、古墳全体の規模、形状がより正確に推定できるようになった。
- ②推定される古墳の規模は、全長 86.0～86.4m、後円部径 51.5～52.5m、前方部長 34.0～34.4m、前方部前端幅 32.0～32.7mである。（全長は前方部前端線（周溝下端）の判断が難しく、推定値。）
- ③古墳全体の形状は、当初推定されたいわゆる「纏向型」（後円部径：前方部長＝2：1）ではなく、後円部径：前方部長＝8：5の、北部九州に多い類型である。
- ④前方部南側側縁部の形状は直線的ではなく、後円部から一度細くくびれて隅角部に向かってゆるやかに広がる。この形状は比較的古い古墳に多い。
- ⑤前方部前端の形は直線的ではなく、おおむね弧状を描くと考えられる。これは、出現期の古墳に多い特徴である。

「古墳時代初頭、あるいは弥生時代終末期から古墳時代初頭の過渡期の時期のもの」との言及がある/「8:5」については定形化のプロセスのものとも考えることもできるかも・・・

⑥前方部南側隅角は、稜線の南側（側縁側）に数段の平坦面があり、上部の狭いテラスには柱穴列があることから、その下の平坦面は「通路」とも考えられる。前方部ないし「突出部」に通路状の施設を持つものは、出現期の前方後円墳や弥生時代後期後半～終末期の「墳丘墓」にある。那珂八幡古墳が「弥生墳丘墓」から「古墳」への過渡期に築造されたことを示唆している。

⑦前方部南側周溝外縁部は、斜面途中に平坦面がある2段掘りで、後円部南側周溝外縁部で確認された状況と類似している。

2. 調査成果からみた那珂八幡古墳の意義

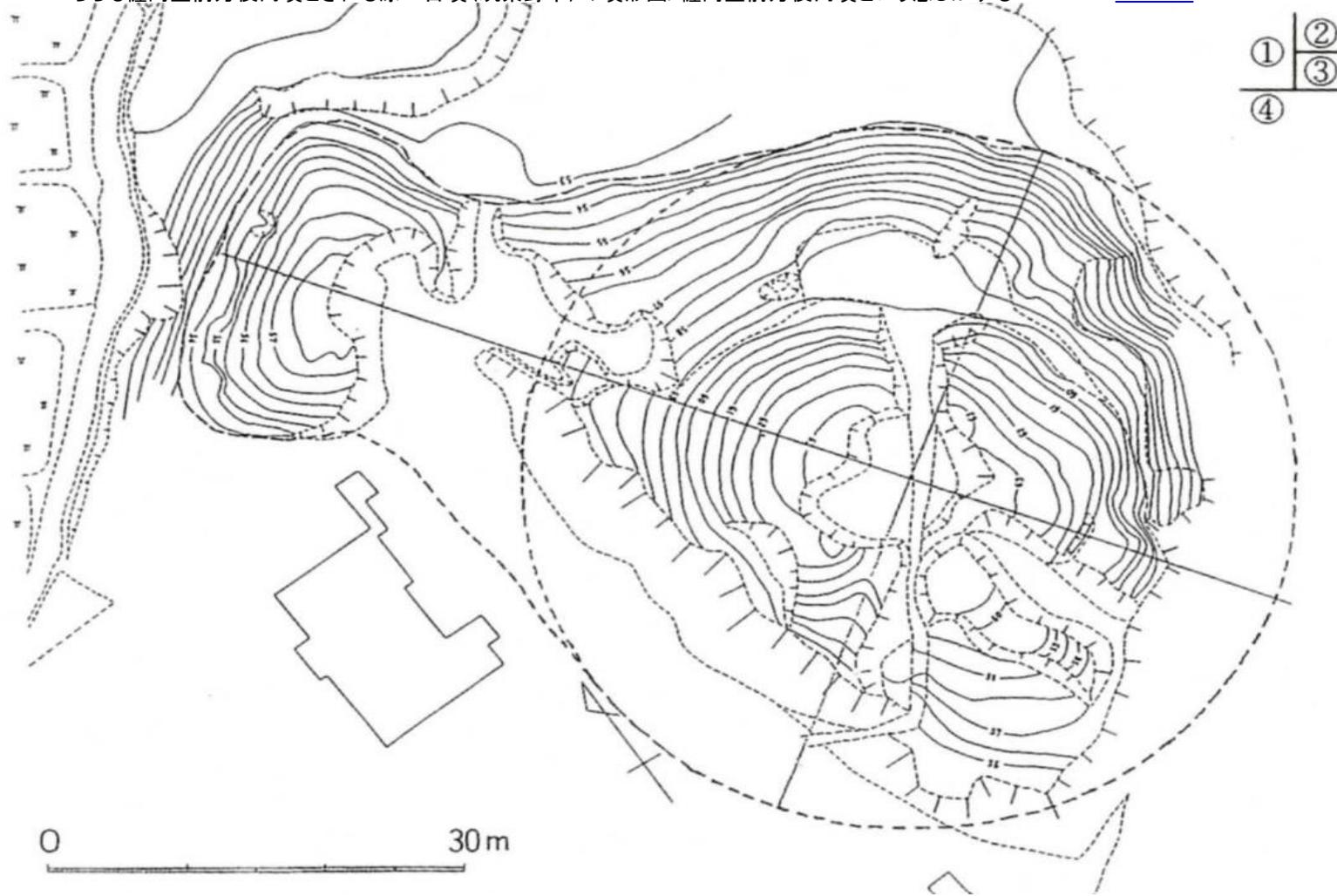
①古墳の時期は、墳頂部や後円部南側周溝下層から出土した土器から、古墳時代初頭、あるいは弥生時代終末期から古墳時代初頭の過渡期の時期のもので、福岡平野あるいは九州最古の古墳の可能性はある。

②今回の調査により、「纏向型」とも推定されてきた那珂八幡古墳は、それとは異なる墳丘比率（後円部径：前方部長）であることが確実となった。

「8：5」という比率は、北部九州の有力な前期古墳の多くに採用されている。那珂八幡古墳は、より古い段階の築造であり、時期的にこれらの墳丘規格の祖型となった可能性がある。

こちらも纏向型前方後円墳とされる原口古墳(筑紫野市)の墳形図/纏向型前方後円墳という感じがする！

[video](#)

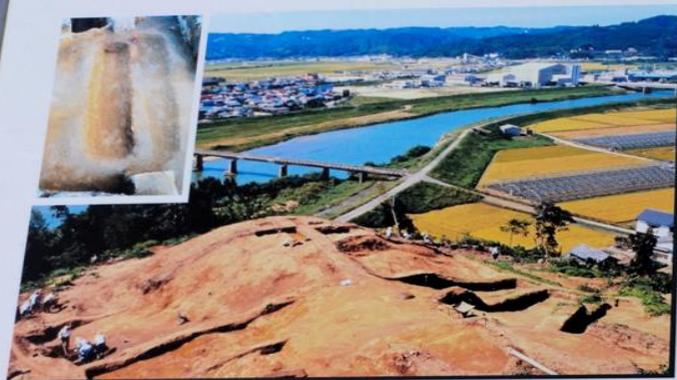


後円部の墳頂にあった標柱

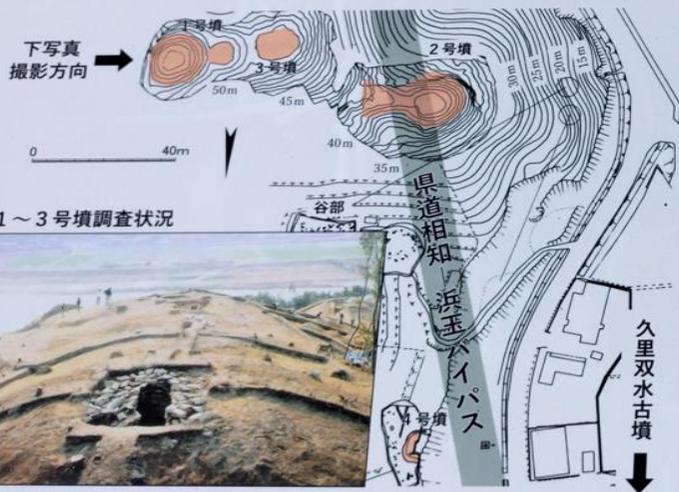
 video



こちらも纏向型前方後円墳とされる双水柴山2号墳(唐津市)



2号墳(前方後円墳)の調査状況と木棺の痕跡



1～3号墳調査状況
双水柴山古墳群の位置と県道との関係 (S = 1/400)

双水柴山古墳群は、県道相知—浜玉バイパスの敷設に伴って発見された、三基の古墳と一基の小墳墓からなる古墳群です。三基の古墳(一、三号墳)は、久里双水古墳から南東約四〇〇mの距離にある丘陵上に位置し、小墳墓(四号墳)は、丘陵北側の谷部付近で見つかりました。古墳時代前期前半から中期に築かれた古墳群であり、なかでも二号墳は、久里双水古墳とほぼ同時期の全長三十二mの前方後円墳と考えられています。こちらの墳丘は盛土を積み上げて全体を形づくっています。四号墳以外の古墳からは、鉄器や玉類等の副葬品が見つかっているほか、一号墳と三号墳には合わせて五体分の人骨が残っていました。唐津の古墳時代前半期の古墳築造の変遷・階層性を考える上で重要な古墳群であることから、平成四年九月に市の史跡に指定されています。

双水柴山古墳群

前方後円墳を含む中型・小型の古墳群

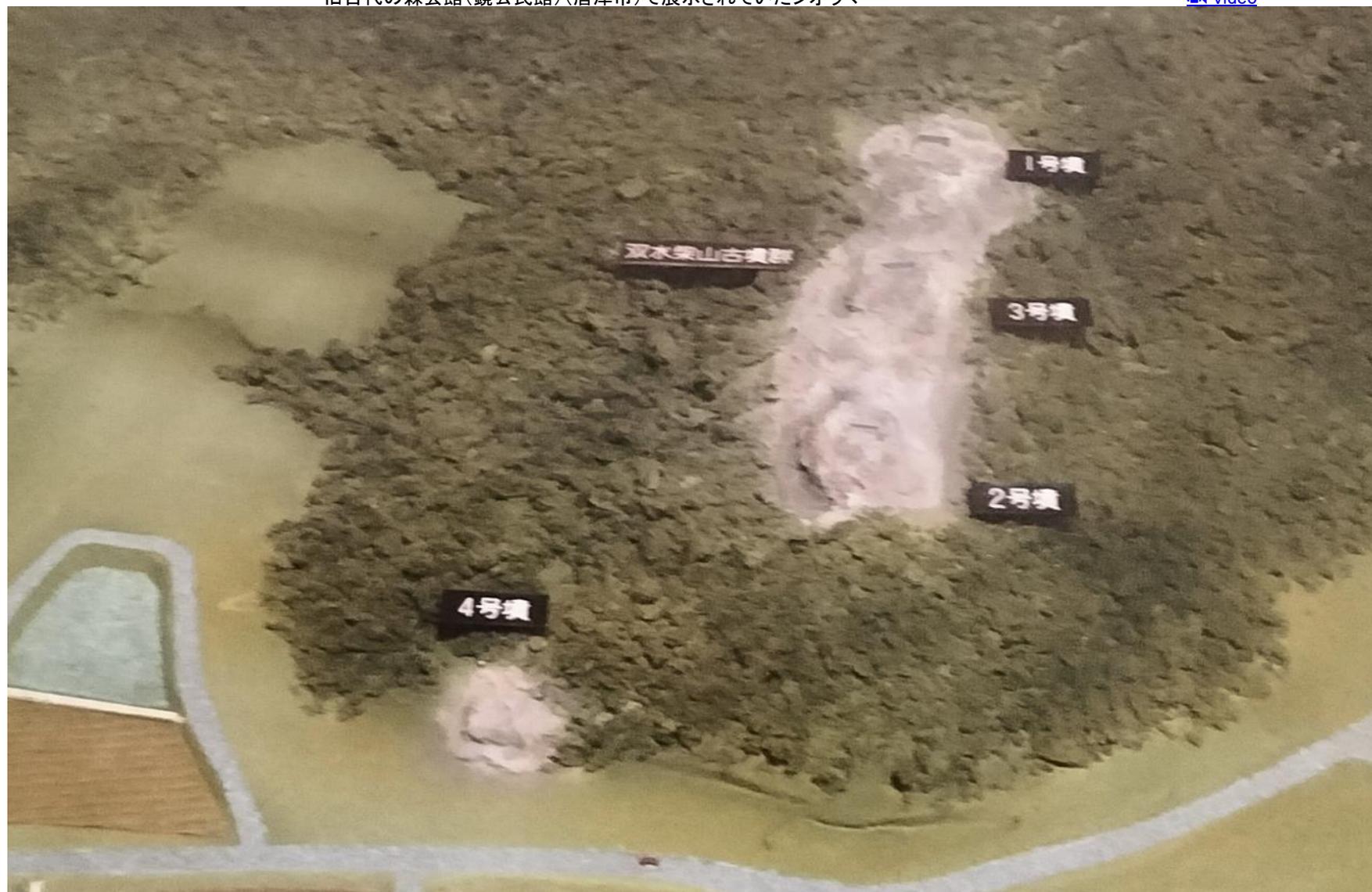
2号墳は県道の敷設により破壊されてしまったようだ



調査状況

旧古代の森会館(鏡公民館)(唐津市)で展示されていたジオラマ

[video](#)



主体部のみにここに移設されていて、「双水柴山2号墳」と刻まれた標柱が立っていた



